

CCTV9 「蘇東坡」採訪事前回答と臨書「黃州寒食詩卷」

河内 利治 (君平)

Toshiharu (Kunpei) Kawachi

- 二〇一六年六月十八日(土)、東京神田にある(株)栄豊齋にて、「蘇東坡」の制作会社「央視紀錄国際传媒有限公司」の採訪(インタビュー)と撮影を受けました。十時から十二時までが採訪、十三時半から十六時まで臨書授業の撮影という二部構成でした。採訪と撮影は、中国中央電視台紀錄片(CCTVチャンネル9)の一環で、九月にはその「特集編」二十一分番組が放映されました^①。採訪での質問事項が先にメールで送付され、その回答を返信しました。それを記録として留めておきたいと思い、加筆修正しました。質問は全部で21項目ありましたが、11番から20番の質問は絵画に関する事柄であるため、ここでは省略致します。
1. 先生の心の中で、蘇東坡はどのような人だと思えますか。——蘇東坡は、憧憬の文人です。天才にして、散文・詩詞・書画のオールラウンドプレイヤーです。宋代の文化精神の典型であるだけでなく、中国文化を代表する文人の一人であると思っています。
 2. 蘇東坡の書作品で、先生の一番好きな作品は何ですか。——現在、台北故宮博物院に収蔵されている行書「黃州寒食詩卷(寒食帖)」が一番好きです。日本に所蔵される作品では「李太白仙詩卷」(大阪市立美術館)も好きです。尺牘にも数多く素晴らしい作品がたくさんあります。楷書では「赤壁賦」でしょうか。肉筆(墨跡)以外にも専帖の『成都西樓帖』は佳いものですよ。
 3. 「黃州寒食詩卷」が日本の収蔵家によって収蔵された物語をご紹介頂けますでしょうか。——数奇な運命を辿った名品です。「寒食帖」は、歴代の皇帝により所持されたものであり、乾隆十年(一七四五)に乾清宮に収蔵されましたが、清末期には円明園に保管されていました。一八六〇年に英仏連合軍が円明園を攻撃したとき、あやうく本詩卷も一緒に焼失するところでしたが、幸いにも略奪されて民間に流失していたため焼失を免れました。本詩卷下端の焼け焦げは、この時のものと言われています。その後

一九二三年（大正十二）に、日本人の豪商菊池晋二（惺堂）の所
有となり、翌一九二三年九月一日に関東大震災が発生し、東京は
一瞬にして火の海となりました。菊池惺堂氏は「寒食帖」を身を
挺して命がけで持ち出したことにより、大火から名品を守ったこ
とで有名になりました。奇跡的にまたもや焼失を免れたのです。

これらのエピソードは、本詩巻末に日本人学者の内藤虎次郎（湖
南・京都帝国大学教授）が詳細に書いています。一九四八年から
四九年ごろに外交部長の王世杰氏が買い取り、一九五〇年に台北
に渡りました。一九八七年に台北故宫博物院に寄贈され今日に至
ります。この間に、二玄社が複製本を制作しています（昭和五十
四（一九七九）年十二月十五日）。二〇一四年（平成二十六）六
月から八月まで、東京国立博物館で特別展『台北國立故宮博物院
―神品至宝―』が開催されたことは記憶に新しいですね。一九三
七年に京都で初公開されて以来の公開となり、日本との関係浅か
らぬものとされています。私自身は、すでに台北故宮で実見して
いましたが、後期展示の本詩巻を参観に行きました。今も縦画を
長く伸ばした「年」「中」「葦」「帚（紙）」の字をハッキリ覚えて
います。

4. 「寒食帖」における「卧聞海棠花、泥汚燕支雪」と言う句の中
で、「花」と「泥」の文字が互いに繋がり、一気に書いています。

艶やかな花が地に沈んでいることは、蘇東坡の高貴から卑しさま
で転換した過程を映すと言われます。この見方についてどのよう
にお考えになりますか。――文学的に考えるとそう言えるのかも
しれません。しかし、書法から見るとそう考えられません。む
しろ「迷い筆」に見えます。「花」の終画「匕」の左下への跳ね
は、通常は「さんずい」の一点目へとスムーズに連続するのです
が、左下に真つすぐ落としてから持ち上げ、うねるように「さん
ずい」の一点目に下から入筆しています。このような書き方は、
「迷い筆」ではないでしょうか。

5. 「寒食帖」において「但見烏銜紙」及び「破灶烧湿葦」と書い
た句について、どのように評価されますか。この句からどのよう
に蘇東坡の感情をお感じになりますか。――詩の意味からすれば、
「食べ物も無く、壊れた釜戸に湿った葦草をくべて、ただ野菜を
煮炊きし、カラスが紙銭を銜えて飛んで行くのを見て、はじめて
寒食節だと知った」と、非常に生活に困窮した様子が歌われてい
ますが、書字には大小と軽重の変化や、長く引つ張った細身の縦
画があり、うら寂しい感じがしません。私は文学作品が持つ叙情
性や思惟性と、書法作品が持つ叙情性や思惟性は直結しないと考
えています。つまり「詩意（诗情）」と、「書意（書境）」が百パ
ーセント一致するとは考えていません。一言で言えば、次のよう

になります。

「寒食帖」 心は自由で曠達・詩は蒼涼で困憂・書は闊達で豪放

心（心情／心意／「象」）を詩（言葉／文字／「形」）にし、それを書として書く。書は作者の「心」の表出であり、詩を媒介にして、「書」として表出される。よって「心⇓詩⇓書」といえます。書は、詩を書くが、傑作とされる名品は、かならず作者の心が表出されています。蘇東坡は、黄州において困窮辛酸の生活を送りながら、心は政争から解放されて自由であり、「曠達」の境地に近づいています。二首の詩は蒼涼多情で困憂惆悵ですが、書は極めて自由闊達で「豪放」です。

6. どうして後世の人は唐宋の書の特徴を「唐人尚法、宋人尚意」で総括しましたか。つまり唐の書が規範を尊重しながら、宋の書が意志を尊重するものでありました。宋の書においてどのような変化が起きましたか。——簡単に言えば、書体の完成から書風の形成へと時代が変遷したと言う事です。唐代に楷書体が完成して以後、新しい書体は今日まで生まれていません。科挙の答案に書く為の小楷は規範として定型化し、それが基に活字が生まれ今日まで続いています。一方、王羲之や顔真卿のように、自作の詩歌や文章を綴る場合には、広汎に行草体が用いられました。日常の出来事から芸術言語まで全てにおいて普及しました。文人が自身

の「意（思想・人品・人格の総体）」を表出することが可能になったのです。その代表が蘇東坡です。

7. 「寒食帖」において表出された蘇東坡の拘束されない自由な個性について、どのように評価されますか。この表象の裏に何がありませんか。——私は何にも拘束されない自由な個性を、高く評価したいと思います。すでに5の質問で答えましたが、蘇東坡の心は「曠達」です。蘇軾の本性が「豁達豪放、情感細膩」であり、苦難の人生体験の中でも、常に心は曠達だからだと思っています。この人生態度は、文人の生き方の典型となつて思慕されていると思います。

8. 世間の人が蘇東坡の書を皮肉つた際、黄庭堅はどのような観点で意見を述べましたか。——蘇東坡の楷書は、唐代の楷書に似ず、字形が扁平で左下に傾斜し、筆法は自然で行書の筆意を帯びています。しかし、懸腕ではなく提腕で書いているため、「左が秀でて右は枯れる」と批判されます。黄山谷は、「余謂東坡書、学問文章之氣。鬱鬱芊芊、發於筆墨之間、此所以他人終莫能及爾。（東坡の書は、学問・文章によつて培われた「氣」であると考えらる。その盛んな気が、筆墨の間に発せられているため、他人には結局真似できないのである。）」と東坡の書を評価しました。東坡の書を「翰林侍書之繩墨尺度（官僚の規矩遵守の楷書）」^③でもつ

て批判するのは、書が表面的にしか見えない輩の基準であり、学問（人格）と文章（芸術）の「気」を書けるのは東坡だけであるとはつきり言っています。二王、顔真卿、楊凝式などの古典を熟練して、自身の骨肉と化した裏付けのある「書」である点を見逃しては成りません。

9. 蘇東坡と黄庭堅の各自の特徴は何だと思えますか。これに対して二人は何か冗談を言いましたか。——相互に両者の書を批評し合った話があります。蘇軾は黄山谷の書を「木の梢に引つかかった蛇」だと言い、黄山谷は蘇軾の書を「石に押し潰されたガマガエル」と言いました。これはお互いが、相手の書の特徴を良く捉えていたことの証です。

10. 蘇東坡の中国の書における最大の貢献は何だと思えますか。蘇東坡は初めて完璧に書を情緒と人生観の段階に向上させました。だからこそ、書は実用と鑑賞に価値を持たせるだけでなく、人生に対して共感できるものだといえます。また、蘇東坡の書における自身の文字内容以外に、人を陶冶し、そして生命や思想を考えさせる効能もあります。これについて賛成されますか。この大きな超越した蘇東坡の書はどんな理由で生まれましたか。またはどんな蓄積と準備があったとおもわれますか。——賛成します。その理由は前述の5および8、後述の21の回答を参照して下さい。

ここで一点だけ付け加えるならば、蘇東坡は「文人の骨気」をもっているため、彼の生涯を通じて表出された散文、詩詞、書画の作品すべてが、最大の貢献であると思っています。次の文章が参考になります。「文人の骨気、是靈魂的骨頭。一個人必先有靈魂、然後才可能有骨氣。那些令人敬慕的文化大師們、已經遠去。那時的他們、有知識、也更有情趣。有性格、也更講人格和品格。（文人の骨気は、靈魂の筋骨である。人は靈魂があつてはじめて骨気をもつことができる。敬慕される文人たちは、すでにこの世にいない。当時彼らには知識があり、さらに情趣があつた。また個性があり、人格や品格を重んじた。）」^④

21. 蘇東坡の書は日本の文化にどのような影響を与えましたか。——日本の文化に対して、哲学思想上、文学芸術史上、非常に大きな影響を与え、今なお数多くの恩恵を蒙っていると考えます。簡単に言えば、「東坡山谷味噌醬油」の流行語、「春宵一刻值千金」の詩句、「東坡同日生」の刻印、「書は其の人の如し」の観照の4つがあると思います。

① 「東坡山谷味噌醬油」の流行語

鎌倉室町の禅僧を中心に古くから親しまれて来た素地があります。「東坡山谷味噌醬油」と言われるように、蘇東坡は黄山谷と共に日本において鎌倉五山の禅僧を中心に広く親しまれました。これは五

山で最も大事にされたものを表しています。家庭に味噌や醤油が必需品であるが如く、我々の精神・教養には東坡・山谷がなければならぬと言っているのであります。室町時代には今のような形に完成したそうです。書のほうは女手、男手が一緒に和様の流儀書道が確立するころでした。その穏やかに治まろうとする実用の書に対抗するにふさわしい書が、黄山谷を学んだ、墨蹟と称される禅僧の書でした。侘び茶が形を整えこの墨蹟が茶がけの第一とされたのは禅の教えをつたえた僧侶への尊敬によるものでした。なお「墨蹟」という言葉は日本では僧侶、たいていは禅僧の書をさし、中国では僧に限らず全ての書を言います。

②「春宵一刻值千金」の詩句

蘇東坡の漢詩句に親しんで来た中国文化からの恩恵があります。「春宵一刻值千金」の句は人口に膾炙しています。林語堂の『蘇東坡』を読むと、彼ほど民衆に愛された詩人は居ないと言っています。が、実際彼は学識が深く拔群の才能を持ちながら、決して威厳ぶることなくユーモアを愛し、誰とでもざっくばらんに付き合う庶民性を持っていました。

「春夜（春の夜）」詩

春宵一刻 值千金 花に清香あり 月に陰あり

歌管楼台 声細々 鞦韆院落 夜沈々

個人的には杭州の風景が重なります。沙孟海先生の「蘇堤」題字と蘇軾の詩も有名です。

「飲湖上初晴後雨（湖上に飲す初めは晴れ後に雨降る）」詩

水光潋滟として晴れて方に好し 山色空濛として雨も亦た奇なり

西湖を把って西子に比せんと欲すれば 淡粧濃抹総べて相宜し

③「東坡同日生」の刻印

書道関連の無数の印刷物に必ずといって良いほど収録され、現代書人の評語が附されます。一例を挙げておきます。

・『書品』 14号「蘇東坡寒食帖」松井如流 一九五一

・二玄社『書道講座②』青山杉雨「行書の歴史」一二四頁 一九七

一

・『書論』 5号「特集蘇東坡とその周辺」一九七四

・『書論』 20号「特集 昭和壬戌赤壁記念 蘇東坡に関する書画資料

展」一九八二

日本では「赤壁会」「寿蘇会」が江戸時代から開催されています。

一八〇二年（享和二年壬戌）柴野栗山を中心とする「赤壁」に因

む詩歌の応酬あり。

一八六二年（文久二年壬戌）池内陶所が同志とともに淀川に遊ん

で「赤壁集字詩」を遺す。

一九二二年（大正十一年壬戌）長尾雨山が主唱して宇治で盛大な「赤壁会」を開催。

特に長尾雨山は富岡鉄斎の息子の桃華とともに大正から昭和にかけて4回「寿蘇会」を開催しています。

面白いのは、富岡鉄斎と今井凌雪が「東坡同日生」という印を使っている事です。お二人とも十二月十九日生まれだからです。作品に実際に捺しているのは、偶々同日生だからかも知れませんが、やはり敬慕の念があるからでしょう。

次のような参考文献がありますので是非参照して下さい。

・朝日新聞社『中国文明選14芸術論集』福永光司「東坡題跋」一九七二

・上海人民美術出版社『蘇軾論書画史料』李福順編著、一八三、日本『支那墨迹大成』、一九八八

・同朋舎出版『書学大系・碑法帖33蘇軾』高木桑風「書法解説」一二五〜一三五頁、一九八五

・二玄社『中国法書ガイド46蘇軾集』一九八八

・講談社『今井凌雪の書道一巻一行書』六〇〜六三頁、一九九五

・NHK出版『故宮博物院10宋・元の書』二〇〜二二頁、一九九八

・成田山書道美術館『生誕百年赤羽雲庭』二〇〜二二

赤羽雲庭は「格調の点で、双鉤填墨である喪乱帖と寒食帖のどち

らが上か、これはバツハとベエートーペンの比較にも通じると思いますが。」と言っています。

富岡鉄斎と今井凌雪とでは、蘇東坡への敬慕の仕方が違うと思いますが、基本技法習得（臨書）から「率意の書」の応用表現（創作）への態度は共通していると考えます。

④ 「書は其の人の如し」の観照

「道」の思想による人生哲学から文人志向への思慕や、書論（『東坡題跋』ほか）に見える書芸術創作の美学（美意識）。「私の書はそれほど佳いとはいえないが、自分なりの新たな創意を出したもので、古人のまねはしていない」という「自出新意」は、蘇軾の文芸理念を探る重要な発言です。ただし決して古人を否定してはいません。

―「書作には手の習熟が必要だ。熟練してこそ表現をささえる神気が充実し、作品に余韻が生じるのだ」と。また甥が彼の書を欲しがった時、「退筆、山のごときもいまだ珍となすに足らず。読書万巻、はじめて神に通ず」の名言を残しました。これは後句に比重が置かれ、前句によって習練をおろそかにしていないことが窺われます。『東坡題跋』の随所で、二王、顔真卿、徐浩、李邕、張旭、楊凝式らの書を称揚していますが、誰か一人を専習するのではなく、諸家の長所を吸収することを、書作の根底に据えて、「肉は豊か、骨は勁く、態は濃く、意は淡し」がその書の特徴といえます。

以上が、採訪への回答です。次に臨書撮影について書き留めておきます。私自身は、二女社複製本「黄州寒食詩卷」を前に置き、同じく二女社の書跡名品叢刊本の各頁を一枚に繋ぎ合わせたものを左横に置き、両方を見ながら六字書きで半紙全臨を繰り返しました。一文字やある字形の細部だけを模倣していると、字間や行間は言うまでもなく、全体感（章法）がつかめません。字間や行間の「間（ま）」は蘇東坡の呼吸ですから、自分の呼吸で書いては似るはずもありません。今までに何度か範書したことがありましたが、日常使っている台湾製兼毫筆を用いて、中锋による筆の開閉と腕の提按（上下運動）の加減を確かめながら練習しました。もちろん字形に注意しますが、そっくり書ける（形似・形臨）ためには、用筆が正しくなければ似ません。しかしどうしても蘇東坡の呼吸からくるアクの強さが表現できないと思います、狼毫の小筆に持ち替えて原寸大で半紙練習をやり直しました（小筆は5〜6本、手に合う筆を探しました）。紙も手漉きの南山という半紙は、吸収性が良く潤濁が出すぎてしまうため、単宣の半切（サイズがほぼピッタリでした）に数度全臨を行いました。その際、速筆ではなくゆっくりとした気分で筆先が紙に食い込むようにゆっくり書くこと、筆を傾けずに全て中锋（中正）で書くことを心がけました。当日の撮影には、半紙に用筆の特徴を示したものを用意して解説し、あわせて拙作臨書を供し

ました（作品図版）。ご笑覧下さい。教室の方々にも撮影が決まってから、各自別途に「寒食帖」を臨模してもらい、添削を行いました。その風景も撮影されています。

今回の「蘇東坡」採訪事前回答と臨書「寒食帖」は、私にとって非常に良い学書経験を積ませてもらったと感じています。よって最後に謝意を記しておきたいと思えます。

①「纪录片《苏东坡》21分钟首映特辑抢先看给东坡先生980年诞辰最好的礼物！」で視聴できる（二〇一六年十一月二十二日現在）。

http://mp.weixin.qq.com/mp/weixin.qq_biz=MzAwNDUxMDIwNQ==&mid=2650744412&idx=1&sn=c6bb44f60809357c37e507fd35162e72&scene=2&srcid=0908472P1yjZusPRHqS4vmvb&from=singlemesssage&isappin stalled=0#wechat_redirect

②『山谷題跋』巻五「跋東坡書遠景樓賦後」

③前注②に同。

④二〇一五年十二月七日にアップされた「民国文人的骨气（図）」参照。

<http://m.secretchina.com/news/gb/2015/12/07/594156.html>

⑤西林昭一著『中国書道文化辞典』（柳原書店、二〇〇九）五七六〜五七七頁参照。

自我來黃州已過三寒
夜年一欲惜春去不
容惜今年又苦雨西月林
蕭瑟沙汀海棠紫花
污豔支雲閣中偷負
去夜半具有力何殊少
年不病起強白
春江欲入戶雨勢未
不已雨小屋如浪舟濛
水雲哀空危夜寒菜
破窳燒濕華那
知是寒食伊人烏
銜帛一門深
九重清墓在万里也擬
哭塗窮死不吹不
起

有黃州寒食二首



40.3×113cm